
紅鬼-ORGA-

城崎 來人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅鬼—ORGA—

【Nコード】

N6893X

【作者名】

城崎 來人

【あらすじ】

—これは正義の物語ではない—

血潮編 其ノ壱

―夜が来る、闇が覆う、悪が蔓延る―

人知れぬ闇の中、人の肉を喰らい、骨を貪る悪鬼あり。

されども世は静かに回る、犠牲一つで止まる事を知らぬ。

―霜月八日十九時十三分・???路地裏―

「た、助けてくれ：！」

暗い路地の裏。

日は既に沈み、街の光の届かぬ場所で、男は子供のように泣きじやくりながら助けを求めている。

恐れ慄き、足をもつらせながらも必死に逃げる。時にはポリバケツや配水管にその身をぶつけながら。

それでも男は気にせず、涙ながらに足を動かす。

何処に、と聞かれれば、『アレ』がいないのならば何処でも良い、と答えるだろう。

では『アレは何か?』、と聞かれても、彼には答えられるわけがなかった。

何故ならそれは、およそこの世の者とは思えないほど、おぞましい者だったからだ。

「グゲッ：ケケカハ！」

低く、くぐもった声が裏路地に響いた。

生肉を叩きつけたような音をたてながら『ソレ』は男に追いついた。

その巨大な図体を引きずるように、それは男に近づいていった。暗い為によく分らないが、背は少なくとも男の二倍はあるだろう。

身体の筋は酷く膨れ上がり、顔と肩が一体化しているようにも見える。

顔は酷く爛れて、齒は常に剥き出しで、一部からは骨が覗いている。

生きていることが不思議なほど狂っており、腐っていた。

その…化け物は、逃げる男を楽しそうに、しかしどこか悲しそうに追いかけていた。

しかしその鬼ごっこも、逃げ道がなくなれば終わりである。

そう、男の逃げた先は行き止まりだった。

慌てて振り返っても、そこには巨体が道を塞いでおり、越えようにも高さはビルの屋上ほどまで昇らなければならぬ。

並の人間にそんな事が出来るはずもなく、男は絶望に叩き落とされた表情をし、その場に座り込んでしまった。

「…助けてくれ…お願いだ…助けてくれよ…？」

最後の望みを込めて、男は『ソレ』に祈るように話しかけた。話を通じるかどうか、分からない。

恐らくは微塵も通じないだろう、そんな諦めがありながらも、本能は生きる為の手段を、一切躊躇^{ためら}う事無く使っていた。

すると一瞬だけ、『ソレ』は動きを止めた。

「…グッ…ゲがけゴゴ…！」

『ソレ』は男が懇願した一瞬、頭を抱えてもだえ苦しんだが、文字通り一瞬の出来事だった。

「クフ、クケケフク！」

苦しみが治まった『ソレ』は、再び男に視線を向けて静かに笑った。

「あ、ああ…あああああ…」

彼の望みはそこで途絶え、その命の灯を、儚く消し去られた。辺り一面を、彼の紅い華で彩りながら…

―同日十六時三十八分―

「坂井会長、この件について聞きたいことが…」

私立神楽坂学園生徒会室で書類と向き合っていると、書記である

伊藤慎吾が躊躇いがちに尋ねてきた。

この学園に入学して二ヶ月で生徒会書記に立候補し、見事選ばれたのだがこれはやはり経験不足によるものだろう、能力があるにも関わらずいまいち自信が無い様で、時折小さなことで会長や他の役員に質問をしてくる。

「なにか分からないことでもあったの？」

「えっと、はい：実はこの部分なんですが：」

そう言いながら会長である坂井の目の前に渡されたのは入学時に全校生徒を対象に取られたアンケートの用紙だった。

見てみると「一言要望」の欄に何かと赤ペンでマークをつけており、坂井は何となく伊藤の聞きたいことが分かった。

しかしあえて口にしない。

「成程、尋ねたいことは何となく分かったけど、聞かせてもらうわ」

「え：はい、えっと：ここに印をつけているように、生徒からの要望でかなりの数で部費を上げて欲しい、という意見が多く寄せられています：」

「そして君はこれに対してどう対処するべきだと思うの？」

「えっ、僕が：ですか？！」

逆に尋ねられるのは予想外だったのだろう、伊藤は目に見えて驚きの表情をしていた。

しかしそれも直ぐに元に戻り、伊藤は僅かに考えた後、思い切って口を開いた。

「：そうですね、実績のある部活に集中させてしまったては新設したばかりの部活に十分に行き渡らなくりますから：更に詳細を書いた予算の使い道を提出してもらうことが良いかと：」

考える、というのはどう対処すべきかを考えていたのではなく、話すべきかどうかを伊藤は悩んでいたようだ。その証拠に、非常に明確な理由も添えた対処法を口にしていた。

その様子に会長である坂井陽菜子は静かに頷いた。

「確かに、それも一つの手ですね。しかしそうした方法を用いれば

人手が足らなくなる恐れもありますが、そのことに関しては…」

「言いだしたのは僕ですから、僕が最後までやります」

坂井が尋ねきる前に、伊藤は言い切った。

言ってしまったから伊藤は「少し図々し過ぎた」とでも思ったのか、慌てて口を押さえた。

が、坂井の反応は彼にとっては予想外だった。

「いいでしょう、その心構えなら実行できますか？」

「え…そんな、僕の意見なんかをそんな簡単に採用しても…」

「もっと自信を持って大丈夫ですよ。悪くない…むしろ良い案だと思います。しかし、さすがに一人では大変だと思うので、生徒会全員でこれは行いましょう。皆さんも、問題ありませんね」

坂井が他の役員に尋ねると、全員が首を縦に振った。

つまりは了承した、ということだ。

「では、全員の賛成が得られたので、今年の予算案は詳細な予算利用予定表の提出をしてもらってから始めます。仕事量が多くなりますが、皆さんよろしく願います」

坂井がそう宣言すると、その場にいる全員が「はい！」と元気良く答えた。

坂井陽菜子は先述の通り、二年生でありながらも神楽坂学園の生徒会長であり、人望の厚い少女だった。

少女というには相応しくないほど大人びた雰囲気纏っており、外部から来た人からは教師と間違えられるほどである。

その人望の厚さは、彼女が困っている人を見ては放っておけない正義漢だから、というものからだろう。この際「漢」については追求しないで置く。

彼女が二年生でありながらも、前期で三年生を押し退けて生徒会長の任についているのも、彼女の方が三年の立候補者よりも頼りに見えたからだろう。

誰だってそう思うだろう、進学の為だけに「生徒会」の称号を得

ようにする人間に比べれば、生徒の為にその身を惜しむ事無く削る人間のほうが上に立ってほしいということは至極当然のことだ。

彼女が生徒会長の任に就いてから、約二ヶ月。彼女の行動の成果は徐々に現れ始め、学園全体が華々しくなった、とでも言うべきだろう。

一般生徒の中には「一年生の頃から始めればもっと良かったのでは？」という声も上がるほどになっていた。それも男女問わず、だ。何よりも彼女が人気な理由は、そのこれまで出した成果よりも、その人間性であろう。

困っている人間が居れば、分け隔てなく助け、悩み事があれば些細なことでも相談に乗り、まさに聖母という表現が当てはまるほどの善人だった。

その日の生徒会業務を全て片付け、坂井は家路についていた。他の役員に手伝ってもらうほどの仕事量ではなかったため、陽菜子が一人残って処理した。

神楽坂学園があり、陽菜子の家のある陣馬市は駅を挟んで住宅街側と学園・商店街側と分かれており、学園生のほぼ全てが線路を跨がなければ家に帰ることはできない。それは陽菜子も例外ではない。

まだ五時程度だというのに既に空には青みがかかり、徐々に黒く塗りつぶされていく。どれだけ街の光が輝こうとも、その黒を照らし出すことはない。

そして、その輝かしい光は地上すらも全てを照らし出せない。

ふと、わき道を見れば三メートルほどまでは道が照らし出されているが、それより奥となるとほぼ暗闇となり、十メートル先は完全な漆黒だった。

漆黒に塗りつぶされたのではない。漆黒を塗りつぶせないのだ。

しかしそれでも彼女は思う。

いつか必ず照らし出す。

いつか必ず塗りつぶす。

苦しむ人が苦しみ続ける世界であってはならない。その為に自分が出来ることから：つまりは生徒会活動から始め、いつかはお世話になったこの町を、誰もが住みやすい平和な町にするために、何か貢献できればと考えている。

そんな事を思いながら歩いていると、わき道から僅かであるが何かがぶつかるとような音が聞こえた。陽菜子は少し耳を澄ますと、「た、助けてくれ：！」と弱弱しいが助けを求める声が聞こえた。

これはただ事ではないと思い、考える間もなく声のした方向へと走り出した。

彼女には腕に覚えがある。

力無くして暴力を治めることは無理だということを子供の頃に痛感し。それ以降地元の道場で鍛えに鍛え、仕舞にはこの辺りで敵う者は殆どいない状態にまでなった。

当然、暴力には暴力ではなく、あくまで対抗する手段であって、解決の手段としては使わない。それが彼女の信念だった。

今回もその場は抑えるが、一時治まってから話し合いで解決しようと考えていた。

相手も人間である以上、話が通じれば和解できる可能性も無いことはないだろう。彼女はそう考えていたのだ。

：その、化け物の姿を見るまでは：

声のした方へと陽菜子は必死に走った。

学内でも一二を競うその足が現場に着くまでに数十秒ほどかった。

「……？」

目の前には壁があった。

それだけだった。

少し辺りを見回してみるが、声の主はいないようで、陽菜子は更に不思議に思い首をかしげた。

(…思い違いでしょうか…?)

それならそれに越した事はないが、どうにも違和感と不安が拭いきれない。

先ほどの助けを求める声は、大の男のもので、怯え具合からは余程のことがあったと見ても間違いないだろう。

それだと言うのに、周囲に人はいない。

どういことだろうと考えようとしたところで、ようやく陽菜子は辺りの匂いに嫌悪感を覚えた。

肉を腐らせて放置したような匂いが裏路地に充満していたのだ。

(…酷い匂いですね…そこに散らばっているゴミでしょうか…)

倒れたポリバケツから匂いが発生していると陽菜子は思って近づくが、そこでおかしい事に気がついた。

…ポリバケツに入っていたものはダンボールだったのだ。

汚れた様子もなく、箱にプリントされているのは『業務用プリント用紙』や『プラスチックファイル』などの文具のものだった。

ダンボールをポリバケツに入れるのはどうかと…とも思ったが、問題はそこではない。

(…なら、この悪臭の原因は…?)

そう思ったところで、ビチャ、という湿った音が路地に響いた。

何かと思っ陽菜子が振り返ると…

先ほど、壁だと思っていたものが、蠢いていた。

「ヒッ…!？」

陽菜子は思わず悲鳴を上げてしまった。

それと同時に、無意識的に口を抑えた。

そうした理由は、おそらく本能だろう。

危険を察知し、生き残ろうとする本能が、声を殺させ、蠢く『ソレ』からゆっくりと遠ざかせたのだろう。

腐臭は蠢く壁からしていることに陽菜子が気付くと同時に、壁から目らしきものが見えた。

視線が偶然重なってしまった。

それと同時に、陽菜子は体の向きを九十度変え、先ほど通っ

た道を逆走した。

「ゲグオオオ！」

およそ人のものとは思えない悲鳴が、暗い路地に低く響いた。

：陽菜子は、『ソレ』と目が合った瞬間、見てはならないものを見てしまった。

人のものらしき、千切られた腕を、『ソレ』が貪っていたところを：

吐き気がする。

眩暈がする。

世界が狂う。

体が覚束おぼつか無くなる。

それでも必死に、来た道を駆け抜けた。

おそらく来た時をはるかに越える速度で。

それでも『ソレ』は追って来る。

最上級の獲物を見つけたような狩人のように。

歓喜して。

喚起して。

奮起した。

悪鬼だった。

(：な、何！？ アレは一体なんなの！？)

考えても答えが出ない問いだと分かっている、そう思わずにはいられなかった。

肺に残っている酸素を全て使っても逃げなければ。

しかし、『ソレ』は何処まで追って来るかは分からない。

もしかすれば、直ぐにでも追うのをやめるかもしれないし、永遠に追い続けるかもしれない。

ゴールの見えないレースで、ひたすら全力で走り続ける辛さを知り、必死に陽菜子は逃げる。

呼吸する事は既に忘れていた。

息をする一瞬で『ソレ』が追いついてくるかもしれない。

振り返った瞬間に、『ソレ』が彼女を喰らっているかもしれない。だから、全身の力を全て逃げることに注ぎ込む。

するとようやく大通りが陽菜子の眼前に見えた。最後は転げるように大通りに出ると、後方から足音が聞こえなくなっていたことによりやく気付くことができた。

振り切ったのかと彼女は思ったが、そうではなかった。

…居る、のだ。

街の光に照らし出されぬよう、息を潜めている。

見えないが、確かにそこにいることが陽菜子には分かった。

(…光が苦手なの?)

最初陽菜子はそう思ったが、それが直ぐに間違いだと気付いた。

『ソレ』は陽菜子を諦めきれないように何度も影から手を伸ばす。

一瞬、その肉が眼前に迫ったので陽菜子は急いで後退し、距離をとった。更に右へと方向を変えようと、腐肉はその動きに誘われるように向きを変えた。しかし腐肉は届かないと見ると、急いで裏路地へと手を戻した。

(…違う、光が苦手なんじゃない…多くの人に見られないようにしている?)

その考えが的を射ていたのか、集団の声が徐々に大きくなると『ソレ』は逃げるように去っていくのが音で分かった。

気配が完全になくなってようやく陽菜子は息をする事を思い出した。

長時間止めていた為だろう、酷く荒い息をしていた。

肺いっぱい酸素が行き渡ることがこんなにも生きていることを実感させる。

身体は小刻みに震えていた。恐怖からか、それとも生きていることへの喜びか。

「だ、大丈夫ですか…?」

その只ならぬ陽菜子の様子に声をかけずに入られなかったのだろう、仕事帰りのサラリーマンらしき中年男性が心配そうに声をかけ

てきた。

「え、はい…だ、大丈夫です…」

「本当ですか？　なんだか顔が青いようにも見えるけど…」

「は、はい。本当に…大丈夫です。少し走って息切れをしているだけなので…ご迷惑をおかけしました…」

陽菜子がそう言うのと、男性は信じきれない様子をしながらもその場を去っていった。心の底から心配しているのだろう、その場を完全に立ち去るまで男性は時折陽菜子のほうへと振り返っていた。

…冬の足音も近づく季節だというのに、陽菜子の身体からは滝のような汗が流れていた。

「…会長、なんだか体調が悪そうですが…大丈夫ですか？」

三日後。

生徒会業務を行っている最中に、書記の女子からそんな事を陽菜子は聞かれていた。

書記の女子は躊躇いがちでありながらも、陽菜子の様子のおかしさに耐え切れず尋ねたようだった。

「え？　あ、いや。大丈夫ですよ」

「そうですか…？　なんだかここ三日間会長の元気がないように見えたので…」

「僕にもそう思いました」

会計の男子もそう言った。

するとそれを皮切りに生徒会役員全員が心配の声をあげた。

「確かに、ここ最近会長が少し静かになったような気がします」

「そうじゃないでしょ？　心なしかやつれた様な感じが…」

「あ、百合もそう思った？　私もそうじゃないかなって思っていたんだけど」

「あと時々小さな物音でも、反応したり…」

彼女は可能な限り平静を装っていたが、やはり隠しきれない部分はあったようだ。

「心配してくれてありがとう。でも大丈夫です」

彼女達の心配は陽菜子にありがたいと同時に申し訳ない気持ちにさせた。

ありがたいというのは、些細な変化でも気付き、心配してくれる周囲の優しさに対してである。

申し訳なさは、それだけ心配してくれる役員達に対して正直に『あの事』を話せないことだ。

出来れば『あの事』を吐き出して氣を楽にしたい。

しかし、もし言ってしまうと彼、彼女達が『アレ』に巻き込まれたら：

おそらく話した自分を何時までも呪うだろう。

そして、『アレ』は可能ならば絶対に近づいてはいけない者だ。

陽菜子は本能的にそう悟っていた。

幸いこの三日間は何事もなく過ごすことが出来たが、幸運に幸運が重なっているだけかもしれない。何時何処で再びあの化け物に襲われるか分からない為、陽菜子は『あの事』以降ともに氣の休まる時間が無かったのだ。

家に居ても眠っている間に襲われることもありえる。もし、あの化け物が学園に潜みこみ虎視眈々と私を狙っているとすれば：悪い想像は考え出すと止まる事を知らず、悪戯に陽菜子の精神を蝕んでいた。

「ところで先日頼んでおいたボールペンの補充は：？」

インクが切れかけているボールペンが多くなり始めたので、陽菜子が昨日庶務の男子に頼んでいた仕事を確認すると、庶務は忘れていたことを思い出したように「あっ！」と声をあげた。

「：：忘れたんですね？」

「：す、すみません：」

「飯田君、なんだか体調が悪そうですが、大丈夫ですか？」

先ほど尋ねてきた女子の真似を陽菜子がすると、庶務の男子は恥ずかしそうに頭をかいた。その様子に周りにいた役員は思わず口を

抑えて笑いを堪えていた。

「いえ、自分は元氣だけが取り柄なので！」

「ですが部活の仲間との買い食いに気を取られて文具店で注文するのを忘れるのは感心しませんね」

「み、見てたんですか!？」

「いえ、想像です」

自ら墓穴を掘ってしまった飯田は更に縮こまった。

「…気配が濃厚になっている…木戸の情報に間違いはないみたいだな」

陣馬市南部にそびえる巨大堤防の上に、その男はいた。

堤防は海に接した陣馬市を津波や台風から守るために設置されており、その大きさはおよそ六メートル。長年陣馬市を守っているため所々に傷が目立つが、それでも揺らぐことのない石の壁はまさに陣馬市の守護神というべきだろうか。

一見、海の被害から陣馬市を守っているようにも見えるが、彼からしてみれば北部の山脈も含めて街の人間を取り囲んでいるようにも見える。

逃げ場を封じるように。

知らずに柵に囚われた羊のようにも、彼には見えた。

本来一般人の立ち入りを禁止しているこの場所にどうやってたどり着いたかは定かではない。一時的に彼は紅い目を光らせて街を見回す。

「…『怪異』は映らない…? 気配がありながらも見る事はできない、なんて初めてだな」

信じられないといったように、今度は身を乗り出して街を見回した。

堤防の縁に片足だけを引っ掛け、梃子の原理で身体を地面に対し水平にする。当然、彼の身体は完全に中に浮く形になった。

しかしそんな雑技団も裸足の妙技をしながらも、彼は余裕の顔で

居た。

「……やはり反応はない……よっ」

勢いをつけて彼は元の体勢に戻る。それも彼にとっては大した事のない様だった。

彼の紅かった瞳は、普通の人間と同じく茶色に変わっていた。

「仕方が無い、名残から地道な調査を始めるしかないな……」

彼は視線を陣馬市北部に位置するとある場所へと向けた。

「……学園に接触した人間がいる可能性あり、か……忍び込むにはそれ相応の用意をしないといけないな……」

そう言うとは彼は顔に手を当て力強く握る。

すると彼の顔は僅かに歪んだ。

手を離すと先ほどの顔とは異なり、少し若くなった少年の顔があった。

造りは同じだが、先ほどの精悍な顔つきとは異なり、どこか幼さとあどけなさを残した顔になっていた。

背も先ほどとは異なり、百八十をゆうに越える身長は百七十程度にまで縮んでいた。

「こんなものか……後は木戸に裏工作と更なる情報収集を頼んでおくか……」

それだけ呟くと、男……いや、少年は身体を翻した。

次の瞬間、巨大堤防の上には影一つ無かった。

血潮編 其ノ貳

「……」

陽菜子の足取りは重かった。

この三日間、出来る限り人通りの多い場所を選び、更には毎日違うルートを歩いていたが、やはり怖いものは怖いのだろう、彼女の手は触れなければ気付かれない程度だが震えていた。

今回は生徒会業務を早いうちに終わらせて、日がまだあるうちに帰る事にしたようだが彼女は安心しきれていなかった。

：何故その日は、『あの事』のあった道を通ろうとしたのか。

彼女にはそれが分からなかった。

無意識のうちに、例の化け物が最後に手を伸ばした場所にまでたどり着いていた。

「……」

そこには先客がいた。

意味深に化け物がいた裏路地へと視線を固定し、静かに眺める奇妙な少年がいた。

時折掛けている眼鏡を弄り、何かを呟き、動いたと思うとおもむろに地面をなぞり始めて裏路地へと進んでいった。

「あっ！」

思わず陽菜子は声をあげ、それが聞こえたのか少年は驚いたように飛び跳ね後退して裏路地から姿を現した。

「え、な、何か……？」

少年は何か自分が間違えたのではないかといった微妙な表情をして陽菜子を見た。サイズが合っていないのか、掛けている眼鏡は鼻先に引っかかり危うく落ちそうになっていた。

「あ、いえ……」

無意識的にあげた声に反応されたものだから、陽菜子はどう説明しようと頭を悩ませた。化け物の危険性を語ってもおそらく信じて

はくれないだろう。そう思って他の言い訳を考えた。

「そ、そこは…裏路地は危ないので、入らないほうがいいですよ？」

…間違った事は言っていない。そう思いながらも要点をえない説明に陽菜子は自己嫌悪していた。

その様子を少年はしばらく黙り、陽菜子を静かに見つめた。

「…ここで、何かあったんですか？」

「…えっと…す、少し凶暴な犬が徘徊しているので…」

端から見ても、陽菜子自身から見ても嘘だということが丸分かりの言葉を並べるが、これで少しでも警戒心を抱き、この場所から離れればと思って出した策だった。

しかし、少年は陽菜子の予想をはるかに上回る反応をした。

「その凶暴な犬…もしかして、人の何倍も大きい『何か』ではないですか？」

その言葉は陽菜子を驚かすには十分な威力だった。

呆気にとられた陽菜子は何も言うことができなくなり、開いた口が塞がらなかった。

「すいません、そんな生き物が居るはずないですよね」

少年は先ほどとは違って明るい様子でそう言った。

そこでようやく陽菜子は我に返ることができた。

「そ、そうですね。取りあえずここは危険なので近寄らない方がいいですよ」

ようやく伝えたいことを伝えきり、陽菜子は安心したように息をついた。少年も裏路地は諦めたのか、静かにその場を離れて商店街の一家に入ってしまった。

陽菜子はそれを見て、その場を去ろうとすると今度は少年が彼女を呼び止めた。何かと試してみるとその手には某コーヒー有名店の紙コップが両手に握られていた。

「すいません。実は僕、この辺りに引っ越してきたばかりなのでこの辺りのことに詳しくないので…」

言いながら少年は陽菜子に半ば無理矢理その手に紙コップを握ら

せる。

「あ、冷めると美味しくないので早くどうぞ」

僅かにせかされて、陽菜子は慌ててコーヒーに口をつけた。入っていたのはカフェオレであり、苦味と甘みの丁度良いハーモニーと温かさが口いっぱい広がった。

この三日間、何時襲われるかもしれないという恐怖感に常に襲われ、気が休まる時間が一時もなく、精神的には既にボロボロだった。食欲も無くなっており、水だけで過ごしてきたので三日ぶりの甘さと苦味は体中に染み渡った。

少年は陽菜子のカフェオレに口をつけたのを確認すると勢い良く話を切り出してきた。

「そこで厚かましいお願いですが、この街を案内してくれませんか？」

陽菜子はそこで気がついた。

報酬の前払い：これは断れなくなってしまった。

「名前は朱鷺沼真理しよめま まりといいます。どんな風に呼んでもらっても構いません」

出会った少年は陽菜子の隣で静かにそう言い、頭を下げた。一端静かな場所で落ち着いて話すよう決め、陽菜子が彼をここ・一葉公いちようこう園につれてきたのだった。

公園では子供たちが無邪気に遊具で遊んでおり、彼女達はそれを眺めるように公園の端にあるベンチの一つに腰を掛けて話し始めたのだった。先ほど朱鷺沼少年が渡したカフェオレはまだ温かく、冷めた手を温めるには丁度良い温度だった。

「坂井陽菜子です。よろしく」

陽菜子は朱鷺沼に釣られるように頭を下げた。

「引越して来たという事は：近いうちに神楽坂学園の編入試験を受ける予定ですか？」

「神楽坂？ そんな名前だったんですね」

「？ ええ、陣馬市に住む人は大抵そこに通いますから…そういう私も神楽坂の高等生です」

少年の反応に疑問を覚えながらも陽菜子は言った。

朱鷺沼の外見は中等生第三学年か高等生第一学年程度だった。

「そうなんですか。えっと、実は僕、両親の言うまま着いて来ただけなので通う学園の名前も知らないんです」

朱鷺沼は申し訳無さそうに頬を人差し指で掻きながら話した。

「どれぐらいこの町に居るかは分からないのですが…それでもこの町を良く知りたいと思って歩いていたんですけど…見事に迷ってしまっ」

「だからといって慣れない町で裏道を通ろうとするのは自殺行為ですよ？」

「反省してます…」

窘めるつもりはなかったのか、陽菜子は朱鷺沼が項垂れると少し慌てた。

「いえ、怒っているわけではないので…」

「そういうわけで坂井さんに町案内をお願いしたのですが…」

「…成程、そういう風に持って行きますか…」

「わざわざ危険だと教えてくれるような人なら安心だと思って顔を上げた少年は微笑んでいた。

「…分かりました、分かる範囲でしか案内できませんが…」

幸い彼女にはこの後の予定がない上に、一人暮らしであるため家の門限は特にない。

彼女は学園に通う以前は両親と共に暮らしていたが、父親が転勤になり母親はそれに付いて行く事にしたので現在は住宅街側にある一軒家で暮らしている。

そこまでの理由は至極単純で、神楽坂学園が国内で上位を争う進学校であることと、父親の転勤が決まったのが学園に合格した後だったということだ。そのため、多少遅くなっても問題は無いと思いい、彼の頼みを引き受けたのだった。

「ありがとうございます！」

彼女の反応に朱鷺沼は元氣よく答えた。突然の大声だったため、周囲の遊具で遊んでいた子供達は何事かと思っただけで全員がこちらを振り返った。

自分の声が大きすぎたことに気づいたのだろう朱鷺沼は再び申し訳無さそうに体を縮めた。あまりに子供のような反応に思わず陽菜子はクスリと笑ってしまった。

「それじゃあ、これを飲み終えたら町を案内します」

互いの手にある物は、人肌程度に温くなっていた。

陣馬市はここ数年で爆発的に都市開発の進んだ元田舎町であり、南は海に、東西北は山に囲まれた土地であり、堤防もあるために人工的な盆地といった市だ。

先述通り北部には商店街と神楽坂学園があり、昔ながらの複雑な街の構造をしている。対して住宅地側はこの数年で開発された場所であるために盤目状に一戸建て住宅が並べられている。

まず陽菜子が案内したのは学園付近と商店街だった。

神楽坂学園は私立の進学校という事もあってかセキュリティが非常に厳しく、部外者は事前の申告無しに入校することは難しい。

彼女の立場を利用して見学させることも不可能ではないが、長く時間がかかってしまい、更には制限時間を設けられてしまう上に監視付きという条件があるため、周囲から見た学園の紹介をした。

それをある程度簡潔に説明すると今度は商店街へと足を運んだ。

夕方になり各店は活気づき、呼び込みの声が右から左からと響き渡り、中央に立っていると何を言っているかさっぱり解らないほどの多重音声状態になっていた。

陽奈子は朱鷺沼に生活必需品を扱っている店を幾つか紹介し、それらすべての店を紹介し終わるとちょうど商店街側と住宅街側に分ける駅へとたどり着いた。

「……すいません、あそこにある高い建物は一体？」

駅構内を渡って向こう側に渡ろうと陽奈子が考えていると、朱鷺沼はいきなり足を止め、商店街側東部にある立てたばかりの高いビルを指さして静かに尋ねてきた。

「ああ、あれは『浦部グループ』の本社ビルだと聞いています」

「……『浦部』？」

「陣馬市の発展に大きく貢献したグループですね。というよりは陣馬市の開発を最初に提案して実行に移した張本人です。おかげさまで過疎化の進んでいた陣馬市に活気が戻ってきました。一年半程前に出来たので非常に新しいことと研究所が併設されていることが特徴です」

「…ふむ…」

嬉しそうに話す陽奈子とは対照的に朱鷺沼はその建造物をにらむように見つめた。運よく陽奈子は朱鷺沼の後方にいたために彼の表情を見ることが出来なかった。

「…ですが、最近妙な噂が流れていますね」

「…噂ですか？」

陽菜子の呟きに朱鷺沼は聞き返した。

「はい。浦部グループがこの町に来てから事件が多くなった、と…」
「そうなんですか？」

「確かに多くはなっているのですが…それも心なし感じる程度です」
「その事件に…浦部が関係していたらどう思いますか…？」

朱鷺沼は視線を一切変えずに陽菜子に尋ねた。

「……………え？」

予想外の質問に陽菜子は思わず聞き返してしまった。

あまりにも突然な話だったので、陽菜子の思考が追いつかなかったのだ。街を発展させた張本人が、街に被害を与えているなど誰が想像できようか。

陽菜子からの反応がないことを確認すると、朱鷺沼は笑いながら振り返った。

「失礼しました。冗談ですよ。でも、仮の話に真面目に付き合っ

しまう辺り、陽菜子さんは真っ直ぐで誠実なんですね」

先ほどの冷たい印象はなく、公園で話したときの朱鷺沼に戻っていた。

「か、仮の話…?」

「はい」

悪びれもなく朱鷺沼は答えた。

「いや、何かの小説で読んだ『巨大企業が黒幕で』という設定を思い出して言ってみただけですよ。まさかここまで真剣に反応されるとは思いませんでした」

からからと笑いながら無邪気に話す朱鷺沼に陽菜子は少なからず怒りを覚えた。

「そ、そういう話はきちんと前置きをして置いてください! 『小説では』とか!」

「あははは! 大抵の人は『そんな馬鹿な』で流していたから大丈夫だと思っていたので」

柄にもなく大声で怒る陽菜子に対して朱鷺沼は非常に楽しそうだった。

ここは駅周辺かつ今は帰宅時間なので人通りも多く、周囲にいた人たちは何事かと思って遠巻きに眺めていた。

「何? 何があったの?」

「分からないわ。ただあの男の子が女の子を怒らせたみたいで…」

「もしかして痴話喧嘩じゃないのか?」

「だとしたら…男の子が二股でもかけていたのかしら?」

「ありえそうね…可愛い顔して…恐ろしい子!」

「あんな美人が彼女だというのに浮気なんて…ふざけている! こちらとら帰っても古女房しか待っていないんだぞ!」

「へー、誰が古女房ですって?」

「そりゃあ、俺のカミさんが…ってお前!? いつの間に!?!」

「あんな美人が…のところかしらね? 買い物帰りであなたを見かけたから声をかけようと思って…」

「あ、あの…話し合えば分かる。だからその手に持っている唐辛子の束を仕舞って…」

「問答無用！」

「ぎゃあああああ！ 辛いいいいいいい！？」

彼女達の会話が新たな犠牲者を生み出していた。そのことによりやく気付いた陽菜子は逃げるように野次馬の輪を突破して駅へと走っていた。

野次馬の注意が中年夫婦の喧嘩に移ると、彼女を追うように朱鷺沼も歩き出した。

幸い野次馬に気付かれることなく無事に抜け出し、飄々と朱鷺沼はその場を後にした。

「ありがとうございます。ここまで大丈夫です」

駅構内を抜け、住宅街側の出入り口で息を切らしていた陽菜子に對し、朱鷺沼はそういった。

「…そ、そう…ですか」

息も絶え絶えながらも答える陽菜子はさすがというべきか、超が付くほどの真面目だった。落ち着いてから答えれば良いものを、わざわざすぐに返す辺り彼女の性格がよく出ている。

「ここからなら自分でもある程度地理は理解しているので…後は気ままに歩いてみます」

言うが早いのか、朱鷺沼は陽菜子の返事を待たずに線路に沿って歩き始めた。

ぽつぽつと街灯が点き始め、彼の後を追うように光が街路を照らしていた。

陽菜子が息を整え、顔を上げると、そこには既に朱鷺沼の影はなかった。

「も、物凄くマイペースな人ですね…」

しかし思い返してみれば奇妙な少年だった。

公園で最初会った時は、大人しそうで控えめな性格に見えたが、

先ほどの様子からは非常に肝が据わっており、かつ朗らかな正確をしていたようにも陽菜子には見えた。

それはそう、まるで役を忘れた役者のようだった。

何をすべきか定まらずに、様々な行動をしているようにも見えた。そして一瞬感じた、冷酷な雰囲気。

僅か三時間のコミュニケーションではあったが、その間に彼はどれだけの役を演じ損ねたのだろうか。

「…考えても仕方が無いですね…」

おそらく彼にも事情があるのかもしれない。そう思って陽菜子は考えることを止めようとした。が、これまでの彼との会話で奇妙な点が幾つもあったことを思い出した。

『その凶暴な犬…もしかして、人の何倍も大きい『何か』ではないですか？』

『浦部に原因があるとしても…？』

…そう、まるで何かを知っているながらも隠しているような反応が何回か感じられた。普段なら話半分に聞いているが、三日前のようなことを体験している陽菜子には意味深に感じられた。

もちろん、事件以降彼女が警戒心を強めているから過剰に反応しているということも充分にありえることだ。

「…帰って休みましょう…」

彼女の自宅は駅から約五分という場所にあるので、このまま帰れば夕飯の準備には十分な時間を確保できる。

両親が転居する以前から陽菜子は家事全般を行っていたのも加えて、この一年間の一人暮らしのおかげで短時間のうちに料理をする事も出来るようになっていた。

やるべき事を早く終わらせて興は早いうちに寝てしまおうと彼女は思いながら家路に着いた。

彼女が朱鷺沼を見つけることが出来なかった理由は至極単純だった。

光の届かない屋根の上にいたからだった。

彼女が朱鷺沼の向かった方向とは違う場所へ向かい、彼はその背を見送っていた。

完全に見えなくなることを確認すると、朱鷺沼はポケットに入っていた機器を取り出して一つボタンを押した。

それは奇妙な機械で、付いているボタンが三つしかなく、一見ではどういふものかは想像できないものだった。

簡単に説明すると、これは耳装着型の通信機器であり、通信対象は事前に設定した二人だけというものだ。汎用性は低いが非特性に優れており、特殊な手段を用いて通信しているため、会話を傍受される心配は皆無だ。

大きさは握り拳に収まる程度の大きさで非常に軽く、行動に一切の支障をきたさないことが最大の特徴だろう。

朱鷺沼はボタンを押すと手馴れた様子でその機械を装着した。

「木戸、頼み事を追加だ」

『よお、真理^{しんり}。一日で二回も連絡をよこすとは珍しいな』

朱鷺沼が話すと、それに応えるように機器が震えた。

声は壮年男性のものであり、低くありながらも朗らかな声だった。強弱をつけたり時々静かだったり機器はまるで生きているようにも見える。

壮年男性の言うことは無視して朱鷺沼は要点だけを話すことにした。一々反応していたら会話が進まず何時までも停滞状態になることを知っているためだ。

「先ほど…と言っても今朝の話だが、その時に学園の編入先を決めていなかったからその…」

『神楽坂学園だろ？ もうすでに俺の方で必要な手続きは済んでいるよ。あとはお前が編入試験を受けて合格すれば終了だ』

「…ああそうだ。しかしお前が既に神楽坂学園に編入手続きをしているとはさすがだな…」

『ああ、そりゃあ陣馬市には神楽坂しか無かったからな』

「……………なんだと…?」

信じきれないといった様子で朱鷺沼は尋ねた。

『更に言えばお前がそこに到着する前にもう手続きは済んでいるよ』
そんな朱鷺沼の様子を一切気にすることなく、壮年の男は悪びれずに言った。

「…編入する学園は自分で決めろ、と言っていたのは?」

『あの時は忘れていたんだ。手続きが終わっていたのに気づいたのは連絡した後だったからからな。いや、歳は取りたくないもんだ』

「歳を取りたくなければささどくたばれ、もうろく耄碌老人が、何時までも四十二でいられるぞ。まあ骨と肉と血の塊になるがな」

怒りを堪えている為静かではあるが言葉の端々には殺意がはみ出していた。というより殺意しか含まれていなかった。

それもそうだろう、彼・朱鷺沼も陽菜子に負けず劣らずの真面目な男であり、探せと言われれば街全体を歩き回って下調べをし、頭を全回転させて短期間で決めるほどだ。

加えてこの壮年男性から早期の解決を頼まれているため、そんなことに時間を割けるのはこの日だけだったのだ。

それを見事に『意味なし』と遠まわしに言われたのだ。並みの人間なら怒っても仕方のないことだろう。

『歳を言うな、歳を。ただでさえ厄年だというのに加えて独身だからな…どこかに結婚相手は居ないか?』

「性別を問わなければいくらでも紹介できるが?」

『すまん、女性オンリーで頼む』

「元女性と心だけは女性。どっちが好みだ?」

『体が女性、でよろしく頼む』

「なら諦めろクソジジイ、その選択肢はそもそも存在しない…言うことも言ったからもう切るぞ」

それだけ言い朱鷺沼が機器の真ん中のボタンを押すと、先程までほぼ絶え間なく震えていた機器はウンともスンとも言わなくなった。その静かになった電話を黙ってしばらく見つめる。

「…女性好きと忘却癖がなければなあ…」
朱鷺沼は諦めがちに息を吐きながら静かにつぶやいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6893x/>

紅鬼-ORGA-

2011年11月12日03時14分発行